様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2013～2014
課題番号：２５８８４０４５

研究課題名（和文）ヤコポ・ヴィニャーリの作品研究ードミニコ会修道院との関係をもとに

研究課題名（英文）On Jacopo Vignali and the Dominican theology

研究代表者
坂本　篤史（Sakamoto, Atsushi）

神戸大学・大学院人文学研究科・研究員

研究者番号：００７１０３５２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：17世紀フィレンツェ画壇、わけてもカルロ・ドルチの師匠として知られる画家ヤコポ・ヴィニャーリ(1592-1664)と、同地におけるドミニコ会のサンタ・マリア・ノヴェッラ修道院、サン・ベネデット・ビアンコ信心会との関係を現存作品の様式分析や、同修道院に所蔵される未公刊資料、とりわけ『年代記』に基づいて再構築するとともに、ヴィニャーリの絵画作品に表出したドミニコ会思想の影響を探った。

研究成果の概要（英文）：The research was focus on reconstructing of the relation among 17th-century Florentine school, particularly Jacopo Vignali (1592-1664), the Dominican monastery of Santa Maria Novella in Florence and the Confraternity of San Benedetto Bianco, based on the stylistic analysis of the pictures and on contemporary historical materials: mainly the unpublish Chronicles conserved in the archives of the monasty.

研究分野：イタリア美術史

キーワード：17世紀フィレンツェ派　ドミニコ会

１．研究開始当初の背景

報告者は、17 世紀フィレンツェ派のヤコポ･ヴィニャーリ(1592-1664)の画業について博士論文を執筆し、彼の全作品目録を作成した。その調査にあたっては、先行研究を咀嚼しつつ、フィレンツェに所蔵される古文書記録や作品を所蔵する各機関・施設を訪れて調査を行い､それらを編年順に並べて､合計 189 点の総作品目録を作成した。質、量ともにこれ以上の作品目録はいまだに刊行されていないため、それらを用いれば独自の研究をすることが可能だと考えた。

その研究結果の一例を挙げれば、報告者は、17 世紀に芸術家列伝を執筆したフィレンツェ出身のフィリッポ・バルディヌッチが所持していた調査ノート(フィレンツェ国立図書館所蔵)の記述を通して､ヴィニャーリがフィレンツェ、サンタ･マリア･ノヴェッラ修道院のために複数の作品を制作していることを知った。次に、同国立文書館に所蔵される文書群(Conventi Soppressi dal Governo Francese, 102, 102 Appendice)と同文化財局が管理する美術品台帳を網羅的に調べ、作者不詳の《ジョルダーノ・ダ・サレルノ》と主題が明らかになっていなかったヴィニャーリの作品が同修道院のために制作したものであることを突き止めた。その調査において浮上したのが、同修道院に所蔵される未刊行の『年代記』である。これは 17 世紀に執筆されたもので、歴代の修道院長が行った事業がラテン語で記された手稿本であるが、それによればヴィニャーリは、1618 年から少なくとも 1662 年まで断続的に修道院と関係を結んできたという。これらを丹念に読み解けば、修道院とヴィニャーリの関係が立体的に浮き上がると報告者は確信した。

このような調査結果から、ヴィニャーリはドミニコ会の影響下にあったという仮説が浮かび上がった｡ヴィニャーリはさらに 1614 年から白衣の聖ベネディクトゥス信心会(以下､聖ベネディクトゥス信心会と略記)に属していたことがすでに知られていたが、この信心会の拠点(オラトリオ)は、やはりサンタ･マリア･ノヴェッラ修道院に隣接し、そこの修道院院長が精神的指導者として君臨していた。そのため、この信心会がヴィニャーリに注文した作品には、ドミニコ会からの影響がより一層表われていると考えられる。

折よく、当時フィレンツェ大学大学院に所属していたジョヴァンニ・セラフィーニ氏は、聖ベネディクトゥス信心会旧蔵品を再発見し、その中にはヴィニャーリ作品も数点含まれており、同氏から最新の研究状況を得ることができた。

こうしてサンタ・マリア・ノヴェッラ修道院の活動と近年注目を集めている聖ベネディクトゥス信心会が注文した絵画作品を実証的に調査する環境が整い、ヴィニャーリ作品にみられるドミニコ会思想の影響を探ることが可能とができると考えた。

２．研究の目的

報告者は､17 世紀フィレンツェの画家ヤコポ・ヴィニャーリ(1592-1664)の作品を、ドミニコ会思想を通して読解することを目的とする。この画家は生涯にわたって、フィレンツェにおけるドミニコ会の拠点であったサンタ・マリア・ノヴェッラ修道院と、同修道院の影響下にあった聖ベネディクトゥス信心会に 1614 年から所属し、そこで多くの作品を制作するなど熱心な活動を行っていた。彼が制作した作品の全容は明らかになっていなかったため、その作品群を用いた解釈研究を行うことは困難であった。報告者は、博士論文で彼の総作品目録(総作品数 189 点)を作成することによって、画家の基礎研究の多くをすでに終えていた｡17 世紀フィレンツェ派研究はまだまだ歴史が浅く、その大部分が基礎研究の段階に留まっているが、報告者は、ヴィニャーリの作品についてそこから一歩踏み出して作品解釈を加えるいわば先駆的研究となると考えた。

３．研究の方法

本研究は 2 年間で行うものである。初年度は理解に時間を要するテキストの読解から始めた。具体的にはサンタ・マリア・ノヴェッラ修道院の『年代記』を読解することで、17 世紀において修道会がどのような活動を行っていたかをヴィニャーリとの関係に着目しながら具体的に検証する。次に同修道院の院長を務めたドメニコ・ゴーリなど修道院にゆかりのあるドミニコ会士の著作を読解しながらその思想を理解した。ゴーリの著作についてはその大部分が未刊行であるため、フィレンツェにてその調査を行った。それと並行してヴィニャーリの作品に適宜立ち返って具体的な影響関係を探っていった。とりわけ聖ベネディクトゥス信心会がヴィニャーリに制作させた作品には、ドミニコ会思想からの影響がより色濃く表われている可能性があるため慎重に検討した。2 年目も、時

間の許す限りテキスト読解に時間を割いていくが、徐々に作品研究に比重を置いていった。適宜フィレンツェに渡航し、絵画作品の調査も積極的に行っていくと同時に、様々な研究者との意見交換を行って見識を深めた。

４．研究成果

17 世紀フィレンツェ画壇、わけてもカルロ・ドルチの師匠として知られる画家ヤコポ・ヴィニャーリ(1592-1664)の画業再構築の一環として、様式分析や同時代史料に基づきながら、フィレンツェのサンタ・マリア・ノヴェッラ修道院のために制作された諸作品の帰属とその主題特定、解釈を行った。その結果に基づき、第 66 回美術学会全国大会で口頭発表を行い、また『美術史』に論文を発表した。その内容は以下の通りである、

本研究では主にサンタ・マリア・ノヴェッラ修道院の年代記（未刊行）に依拠しながら、同修道院におけるヴィニャーリの制作活動を一六一〇年代後半から辿っていった。画家は、修道院に隣接していた聖ベネディクトゥス信心会に一六一四年から所属していたが、この信心会の精神的指導者こそが、同修道院の修道士ドメニコ・ゴーリであった。画家は、この時の活動を通してゴーリと密な関係を結び、彼を介して修道院と関係を結んだことを明らかにした。ここではまず、ゴーリが同修道院長として新たな二つの試み、つまり死者の追悼式およびフランシスコ修道会との合同祝祭を企画したことを述べたうえで、関連する美術装飾の制作を依頼されたのがヴィニャーリであったことを新たに提示した。つまり前者においては棺の装飾（現存せず）を、後者においては今日同修道院聖具室に所蔵される《聖ドミニクスと聖フランチェスコ》ならびに《聖トマス・アクィナスと聖ボナヴェントゥーラ》を彼は制作した。さらに現存する二枚の作品のうち、聖フランチェスコの準備素描が現在フランチェスカーノ美術館に所蔵されていることもここで新たに指摘した。

第二章以降では、修道院の装飾事業に着目しながらヴィニャーリの活動を辿っていく。画家は、ゴーリの死後も断続的に修道院の注文に応え、一六二六年の復活祭には《ピエタ》を、そして福者の部屋の装飾にあたった。前者については、今日ローマ、ブラジル大使館に所蔵される作品との関連性がすでに研究史で指摘されているが、ここでは年代記の記述と聖具室係の帳簿記録を新たに提示し、作品制作の背景をより詳細に提示した。福者の部屋の装飾については、その装飾プログラムが、ドミニコ会修道院の繁栄とその歴史を視覚化することであった点、また《福者ジョヴァンニ・ダ・サレルノの肖像》がそこからの伝来したことを新たに指摘する。第三章では、一六三六年に完成した図書館のために制作されたものとして、アルベルトゥス・マグヌスの絵を特定し、今日ブレスト美術館に所蔵される《聖トマス・アクィナスの幻視》は、後世に切断され縮小されたものの、元来は図書館から伝来したものであるという仮説を提示した。

以上のような考察を通して、本研究はヴィニャーリについての基礎研究を補完しながら、従来指摘されてこなかった画家と修道院の密な関係を浮き彫りにした。

さらには、そのほかの図書館の装飾事業としてやや時代は遡るが、シエナ、ピッコローミニ図書館の図像プログラムについて考察したトンマーゾ・ランファーニの論文を翻訳することで、図書館装飾のイコノグラフィーをやり俯瞰的な視野からとらえることも行った。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

① ランファーニ　トンマーゾ（著）、坂本篤史（訳）、シエナ、ピッコローミニ図書館の図像プログラムに関する一試論、美術史論集、査読有、第 15 号、2015、189－198

② 坂本　篤史、サルヴィアーティ・コレクション研究、鹿島美術研究、査読有、年報第 31 号別冊、2014、320－327

③ 坂本　篤史、ヤコポ・ヴィニャーリとサンタ・マリア・ノヴェッラ修道院、美術史、査読有、第 177 冊、2014、50－67

④ 坂本　篤史、展覧会評『大公子フェルディナンド（1663－1713）：コレクター／パトロン』について、美術史論集、査読有、第 14 号、2014、136－149

⑤ Sakamoto Atsushi、Contribution to Studies on the Art Collection of Gran Principe Ferdinando de' Medici: On the Image Source and Theme of the Three

Pictures by Bartolomeo Ligozzi and Livio Mehus、Kobe Review of Art History、査読有、vol. 14、 2014、(1)－(7)

〔学会発表〕（計１件）

① 坂本　篤史、ヤコポ･ヴィニャーリとサンタ･マリア･ノヴェッラ修道院、第 66 回美術史学会全国大会、2015.5.12、関西大学（大阪府）

〔図書〕（計１件）

① ヴァザーリ　ジョルジョ（著）、森田　義之、越川　倫明、甲斐　教行、宮下　規久朗、高梨　光正、足立　薫、石澤　靖典、飛ヶ谷　潤一郎、高橋　健一、深田麻里亜、坂本　篤史、友岡　真秀、（訳）、中央公論美術出版、美術家列伝、2015、547(240－348、278－284、294－300)

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
坂本 篤史（SAKAMOTO, Atsushi）
神戸大学・大学院人文学研究科・研究員
研究者番号：００７１０３５２

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：